専門学校生の国語力

島村　直己
（国立国語研究所主任研究員）

矢部　玲子
（藤女子大学非常勤講師）

1．はじめに

学力低下が指摘されている。最初は、高校理科の履修方法に関連して問題提起がなされていたに過ぎなかったのに、続いて大学生の数学の学力の低下が指摘され、それは国語にまで及んでいる。その余波は、中央教育審議会の審議事項が教養教育となったり、また、文化審議会国語部会の審議事項が国語力となったりしたことに表れている。学力は、本当に低下したのだろうか。

筆者らは、昨今の学力低下問題に関連して１つの仮説を持っている。それは、もともと日本人の学力は高くないという仮説である。すなわち、学力が低下したのではなく、低学力が顕在化したに過ぎないという仮説である。数学の学力低下が指摘された経済学部の学生についても、知り合いのある経済学者によれば、以前からささやかれていたことであるという。国語についても同様に思う。日本人の国語力が高いということで、よく引き合いに出されるのが、昭和23（1948）年実施の日本人の読み書き能力調査の結果である。この調査によると、非識字者はきわめて少なく、1.7％に過ぎなかった。しかし、この調査と戦前に徴兵検査のときに行われた検査の結果とを擦り合わせした島村（2001）によると、この調査の結果には不合理な面がいくつかある。日本人の読み書き能力調査の結果は、信頼性に乏しいのである。

本稿では、専門学校生の国語力に関して行った調査の結果を報告し、あわせて国語力向上のための提案を行うことを目的とする。専門学校生を対象にしたのは、同じ年齢層の中で、能力に関して平均的な位置を占めると思われるからである。

2. 調査の概要

2. 1 調査の構成

調査は、2回に分けて行った。1回は、漢字文化の知識に関して、もう1回は、読解と話しことばに関してである。

2. 2 対象

札幌市のビジネス系の専門学校の学生である。簿記、グラフィックデザイン、福祉、エンドユーザーコンピューティングなどの学科を持つ。高校卒業直後に入学した者が大部分を占めるが、大卒、社会人経験者も10%弱いる。2回の調査について、それぞれ別のクラスを対象とした。1回目の調査が79名（うち男45名、女34名）、2回目の調査が63名（うち男35名、女28名）である。性別構成は、男性がやや多い。

2. 3 実施時期

2002年7月

3. 調査の結果

3. 1 調査対象の国語の学習歴

調査対象がどのような国語の学習歴を持っているのかを、第一に、高校のときの履修科目と、第二に、高校までの国語の好感度の2つから見ることにしよう。これは、第1回目の漢字文化の知識をたずねる調査のときに行った。高校国語の各科目の履修率は、次のとおりである。

国 語 Ⅰ	77.2%
国 語 Ⅱ	65.8%
国語表現	34.2%

現 代 文　70.9%
現 代 語　10.1%
古 典 Ⅰ　48.1%
古 典 Ⅱ　29.1%
古典講読　11.4%

国語Ⅰは、必修であるのに、77.2%の履修率は意外である。これだけ低い数字を見ると、単なる記憶違いとは思えない。やはり履修しなかった生徒がいるのだろう。高校に入学してくる生徒の多様性を重視して、各教科とも選択科目を多くするというのが今の高校教育の特色であるが、現場では、学習指導要領の規定以上に柔軟な科目選択を許しているように見られる。

国語Ⅱと現代文が約70%である。国語Ⅰとあわせて、この3科目を履修するのが専門学校生の国語学習のスタンダードのようだ。そして、古典Ⅰの履修率が50%近いことをあわせて考えると、調査校となった専門学校生は、普通科の高校の卒業生が多いように見える。

国語表現、現代語の履修率は低い。この2つの科目とも指導方法がたいへんに問題となった科目である。次の学習指導要領で、国語表現は残るものの、現代語は消える。やむを得ないことといえよう。

次に、小学校、中学校、高校、それぞれの時期の国語の好感度を見ることにしよう。それぞれの時期に国語を好きだったと答えた者の比率は、次のようになる（「はい」「いいえ」「どちらでもない」の3肢から1つ選択）。

小学校　35.4%
中学校　27.8%
高　校　19.0%

「はい」と答えた者、すなわち国語が好きと答えた者の比率は、小学校、中学校、高校とあがるにつれて、だんだんと少なくなってくる。その反対に、「いいえ」と答えた者の比率がだんだんと多くなってくる。

高校の国語が嫌いな場合、理由を書いてもらったが、教師等に対する感情的なもの以外、受けた内容等に関してあまり明確な理由は書いてい

ない。筆者の周囲の高校生を見ていると、どの教科についても、学年が進むにつれだんだんと嫌いになってくる生徒が多いようである。また、勉強を嫌いであることに、あまり罪悪感を持たないように見える。参考までに、国語を嫌いと答えた者（「いいえ」と答えた者）の比率もあげておく。

小学校	29.1%
中学校	40.5%
高　校	43.0%

高校の国語が嫌いと答えた者の中に、古文と漢文が嫌いだからと答えた者がいた。古文と漢文では、どちらが好きかということもたずねているので、それを次にあげる。

古　　文	17.7%
漢　　文	25.3%
どちらともいえない	57.0%

後に述べる調査２で、古文の理解度を調べている。結果を先取りすると、古文の理解度は非常に低い。しかし、この結果は仕方ないと思っている。古文は現在に生きていない。つまり、古文は現在では普通に使われないという言語環境が浮き彫りになってくる。それに対して、漢文は故事成句などの形で現在に生きている。古文よりも漢文のほうが好きと答えた専門学校生のそう答えた理由は、このような言語環境の中で生活している若者の現状を端的に表している。これは、逆説的な見方をすれば、現在のカリキュラムにとって、古文を学んでも「活かせる」環境がほとんど存在しないこと、つまり、古文の教育内容と実際の言語環境との乖離を物語るものともいえないだろうか。この結果は、現在の古文離れの理由を、よく示しているといえよう。

3．2　漢字文化に対する知識

道具はただ使うだけでなく、その道具がどのようにしてできたのか、そして、他の道具とはどのような関係にあるのか、ということなどを知ると、その道具に対してもっと愛着を持ってよく使えるようになる。

漢字も例外でない。漢字は思想表現のための道具である。単にその読み書きの練習をするだけでなく、漢字そのものについて、たとえばその起源や周辺の知識などについても知っておくと、よりよく漢字が使えるようになる。日本漢字能力検定協会の漢字能力検定の文部省（当時）認定を受けるための出願書の下書きは、頼まれて筆者が行った。その際、漢字力のポイントとして、次の２つをあげた。１つは、語彙との関係を取ることである。どの程度の数の漢字を読み書きできるかどうかということは、漢字力の広さである。それに対し、どの程度の数の語を表記できるかということは、漢字力の深さである。広さと深さで漢字力をとらえるべきだというのが、第１のポイントである。そして、第２のポイントは、漢字文化に対する知識である。

単に漢字を読み書きできるだけでは準１級止まりとし、その上に漢字文化に対する知識がある場合のみ１級とすべきだとした。漢字検定が実際にどのような級の認定基準を設けているのかは、同協会のホームページによると、上記の考え方に基づいている*1。

余談になったが、この観点から、次の問題を出題した。（　）内に正答を示す。

・次の文章中の（　）の中にあてはまる語句を記入してください。

(1) 文字には、(表意) 文字と表音文字がある。漢字は（表意）文字である。

(2) 日本語はふつう漢字と仮名で書かれる。このような日本語の文章を漢字（仮名）交じり文という。

(3) 漢字の書き順を（筆順）という。

(4) 漢字は(点画)から成っている。点画の数のことを(画数)という。

(5) 漢字は、元々は（中国）で作られたものである。それが、(朝鮮)半島を経由して日本に伝わったのは紀元１世紀ごろといわれている。今では中国、日本のほかに、(台湾) でも用いられている。

(6) 漢字が伝来する前に日本にも文字があったという人がいる。そういう文字を（神代）文字という。

(7) 漢字には、音読みと（訓）読みがある。（音）読みは中国から伝わった読み方で、（訓）読みは日本で作られた読み方である。
(8) 音には、伝わってきた時期によって、漢音、（呉）音、唐音などの区別がある。
(9) 「組」の訓は、「くみ」であるが、「番組」ということばの中で使われると、「ぐみ」と濁る。この現象を（連濁）という。
(10) 「縁」の音は「エン」であるが、「因縁」ということばの中で使われると、前の文字の発音の影響を受けて「ネン」と読む。この現象を（連声）という。
(11) 漢字の訓読みを固定するために仮名を送ることを（送り）仮名という。
(12) 仮名は漢字から作られたものである。漢字の草書体をもとに作られたものを（平）仮名といい、漢字の部分を取って作られたものを（片）仮名という。
(13) 古代の歌集「万葉集」は、すべて漢字で日本語を表記している。「万葉集」のような漢字の使い方を特に（万葉）仮名という。

正答率は、次のとおりである（%は省略する）。

(1) 文字には、(1.3) 文字と表音文字がある。漢字は (1.3) 文字である。
(2) 日本語はふつう漢字と仮名で書かれる。このような日本語の文章を漢字 (21.5) 交じり文という。
(3) 漢字の書き順を (1.3) という。
(4) 漢字は (1.3) から成っている。点画の数のことを (36.7) という。
(5) 漢字は、元々は (57.0) で作られたものである。それが、(25.3) 半島を経由して日本に伝わったのは紀元1世紀ごろといわれている。今では、中国、日本のほかに、(21.5) でも用いられている。
(6) 漢字が伝来する前に日本にも文字があったという人がいる。そ

ういう文字を（0.0）文字という。

(7) 漢字には、音読みと（88.6）読みがある。(64.6) 読みは中国から伝わった読み方で、(63.3) 読みは日本で作られた読み方である。

(8) 音には、伝わってきた時期によって、漢音、(1.3) 音、唐音などの区別がある。

(9) 「組」の訓は、「くみ」であるが、「番組」ということばの中で使われると、「ぐみ」と濁る。この現象を（0.0）という。

(10) 「縁」の音は「エン」であるが、「因縁」ということばの中で使われると、前の文字の発音の影響を受けて「ネン」と読む。この現象を（0.0）という。

(11) 漢字の訓読みを固定するために仮名を送ることを（48.1）仮名という。

(12) 仮名は漢字から作られたものである。漢字の草書体をもとに作られたものを（16.5）仮名といい、漢字の部分を取って作られたものを（16.5）仮名という。

(12) 古代の歌集「万葉集」は、すべて漢字で日本語を表記している。「万葉集」のような漢字の使い方を特に（13.9）仮名という。

問(1)。表意文字と表音文字との間の区別をほとんどの学生が答えられない。学習指導要領では、「平仮名」「カタカナ」「漢字」の別を自明の理として扱い、ことさらに、この区別やそれぞれの特徴を教えるようには述べられてはいない。表意文字と表音文字の区別を教え、漢字は表意文字で仮名やアルファベットは表音文字であるということを教えることによって、漢字の文字論上の特性を教えることができるはずである。そのようなことがらが十分に教えられていない状況が、改めて明らかになった。平仮名、片仮名の問題もまったくの低率であることがそれを物語っている。

問(3)(4)「筆順」「画数」、問(11)「送り仮名」は、小学校で習うものであるが、すべて50％に満たない。筆順にいたっては、わずか1.3％に過ぎない。教師がきちんと教えていないのか、それとも、意味を理解して覚え

ていないのか、そのどちらかだろう。両方であるともいえる。小学校の教師は、ことばの意味をきちんと説明して理解させずに、あいまいにそれらのことばを使っているように思われる。

もっとも、教師個人の責任とするには、いささか無理もある。小学校、中学校学習指導要領によると、昨年度まで施行されていた平成元年度改訂のものには、漢字に関する事項ではなく、6年生の表記に関する事項に「送り仮名に注意して書く」と言う記述がある。今年4月から施行された現行学習指導要領も同様で、「送り仮名」は、「意識を持つ」「正しく書く」と、専ら作文の際の心構えとして設定されている。筆順、画数においての言及はない。送り仮名に漢字の読みを固定させる役割があるというのは国語学上の理論だが、早い段階で漢字に関する知識として筆順、画数とともに子供に教えることは漢字を理解する上で有効であると思われる*2。

問⑸の「今では、中国、日本のほかに、(　　)でも用いられている。」の正答は、「台湾」であるが、「韓国」と答えても正答扱いとした。ただし、「台湾」と答えた者はいなかった。

漢字が中国で作られたものであるということは、50%以上の者が知っている。しかし、それが朝鮮半島を経由して日本に伝わったと言われていることは、25.3%の者しか知らない。古代の遣隋使、遣唐使による文化交流、あるいは室町時代の宗との交易によって直接中国の文化が伝わってきたことはあるが、中国伝来の文化は、朝鮮半島を経由してきたものも多くある。日韓両国には、歴史認識など食い違う面もまだ多く残されているが、本調査の結果のような無関心が、また新たな誤解など、問題発生の温床となる可能性も大きい。歴史的事実をしっかり教え、考える機会を与えておかなければ、これからの日本、中国、韓国3国の間の友好関係を築くことは難しいだろう。

問⑹。漢字が伝来する前に日本にも文字があったかどうかということは、諸説あるが、現在は謎である。神代文字の正答率は0.0%であるが、授業でそれを話題に取り上げることは、決して無駄な話ではないと思う。問⒀の万葉仮名も同様である。平仮名、片仮名に先立つ仮名の用法とし

て触れておくのも、決して無益のことではない。文字が成立するまでの過程に想像力を働かせ、ひいては漢字やハングルに興味を持たせるという効果も期待できるのではないかと思われる。

問(7)、音読みと訓読みの区別は、60%以上の学生に理解されている。しかし、このテストと同時に漢字4字を提出してその読みと音訓を区別して答えさせたところ、読みについてはかなりの者が答えているにかかわらず、音訓についてはほとんどの者が答えられなかった。音訓という概念は、一般に理解させることが難しいのではないだろうか。武部(1981)が言うように、音訓は、連濁、連声、音便、活用変化などによる異形態をひとまとまりとして指すことばである。学生たちが音訓について初めて学習する小学校低学年の時点では、このような概念の区別を明確にして教えることは難しい。音訓という概念は、大学で国語学（日本語学）を専攻する学生が理解すればよいものではないだろうか。それは、連濁、連声の正答率が0.0%であることからもいえるだろう。

問(8)。音の種類として、呉音を答えることができた者がわずか1名であるがいた。意外な結果といってよい。

3. 3　読解

問題は、次の3題である。

1. 松尾芭蕉の俳句に、「古池や蛙とび込む水の音」という有名な句があります。この中の「蛙」とは、いったい何でしょうか。
2. 清少納言の『枕草子』は、「春はあけぼの」という句で始まります。この「春はあけぼの」とは、どういう意味なのでしょうか。
3. 加藤登紀子の歌う知床旅情は、「私を泣かすな　白いかもめよ白いかもめよ」で終わりますが、森繁久弥の作った元の詩は、「私を泣かすな　白いかもめを　白いかもめを」だったといわれています。この二つは、どのように意味が違うでしょうか。

1は、芭蕉のこの句を知っていて、しかも「かわず」が「かえる」だということを知っている必要がある。

国語の基本的な教養を見るために出題した。

この句は、小学生でも知っている子どもがいる。筆者は、小学校高学年で友人たちとこの句を唱えていたことを記憶している。しかし、「かわず」が「かえる」であることは、中学校２年になって、兄から教えられて初めて知った覚えがある。

２は、文脈を理解して読んでいるのかどうかを見るために出題した。『枕草子』の冒頭の「春はあけぼの」という句は、これだけを読んだだけでは意味が分からない。「・・・・夏は夜・・・・秋は夕暮れ・・・・冬はつとめて・・・・」と読み進めて、ようやくそれぞれの季節の中で「(いちばん)よいもの」をあげているのだということが分かるのである。『枕草子』は高等学校でだれもが習う教材である。文脈を理解して読んでいるのかどうかを、この問題で見ようとした。

なお、「春はあけぼのが（いちばん）よい」だけでなく、「春のあけぼのはすばらしい」「春はあけぼのがすばらしい、きれいだ、おもむきがある」も正答扱いとした。

３は、「白いかもめよ」と「白いかもめを」とで、助詞の使い方が変わると、全体の意味が変わる。この違いを理解しているかどうかを見る問題である。分析的に読んでいるかどうかを見ようとした。解答を見ると、「白いかもめよ」のほうの理解は、あまり問題がなかった。焦点は「白いかもめを」の理解である。私と白いかもめが同じであると理解していれば正答とした。また、白いかもめを泣かすとだけ答えても、正答とした。

問題別正答率は、次のとおりである。

問題１	55.6%
問題２	19.0%
問題３	23.8%

問題１は、ようやく50%を超える程度である。問題２は、20%を下回る。『枕草子』は中学校でも学習する可能性があるので、高校とあわせて２度学習する確率が高い。それでも、この成績である。問題３も正答率は低いが、問題２よりも高い。ビジネス系の専門学校生なので、現代文のほうが得意なのだろうか。或いは、古文については、学習してもそれ

を活かす環境が極端に少ないということの裏づけであろうか。

以上の３題は、正答なら１題に１点を与えて、平均点を計算したら（満点は３点)、0.984となった。平均して、１題正答するのがやっとという結果である。

不注意による間違いを考慮して、２点以上のものを十分な読解力があると見なした。しかし、その比率は、25.4％にとどまる。

以上の結果は、一面において、すでに述べたように、現在では古文は死んでいる、すなわち普通には使われなくなっているという状況をそのまま示しているといえるだろう。現在、古文は中学１年生から学習している。これは、教科調査官および視学官を務めた藤原宏によると、言語文化の尊重のためであるという。しかし、今回の調査の結果から見る限り、その教育目標は成し遂げられているとはとてもいえない。それどころか、大多数の中学生にとって、古文の授業はほとんど分からない苦痛を与えるだけのものであるという現実が示されているように思う。

繰り返していう。現在において古文は生きていない。古文は、大学で国語学（日本語学）や国文学（日本文学）を専攻する学生が、大学で学習すべきものだろう。それよりも、知床旅情（3.3　読解の問題　３）の成績もよくないところから、現代文にもっと比重をかけるべきだろう。現代文こそが、現在に生きている文章だからだ。

調査結果によると、漢文は古文よりも好かれている。漢籍・仏典などを含む文学がわが国において人口に膾炙し始めたのは、教訓を含む中世説話や往来物によるところが大きい。現在の言語環境においても、諺や四字熟語・故事成句などの形で、その流れは脈々と受け継がれている。これらのことから、古文よりは漢文を重要視したほうが、言語環境の現状により沿った教育が可能であるといえるだろう。古文よりも漢文を重要視すべきだろう。しかし、一部の進学校でやっているような白文を読ませることまではすべきでないと思う。返り点は漢文を日本語に翻訳するための工夫である。高校までは返り点のついた文章を読むことができさえすれば十分だと思う。

3. 4　話しことば

話しことばに関する質問項目と、「はい」と答えた者の比率を示す（選択肢は「はい」と「いいえ」の２つ）。

1.	自分の考えを通すほうだ。	44.4%
2.	人の言うことは、すなおに聞くほうだ。	65.1%
3.	自分の考えをうまく表現できないほうだ。	85.7%
4.	人前で話すのは気がひけるほうだ。	77.8%
5.	平気で教師に質問できるほうだ。	42.9%
6.	知らない人にも気軽に話しかけられるほうだ。	31.7%
7.	英語は得意なほうだ。	12.7%
8.	外国人に話しかけられても平気なほうだ。	33.3%

「自分の考えをうまく表現できないほうだ。」と思っている者が85.7%もいる。表現力にも問題があるのかもしれないが、性格が内向的という面もあるのだろう。それは、「人前で話すのは気がひけるほうだ。」が77.8%いることに表れている。同様に、「平気で教師に質問できるほうだ。」「知らない人にも気軽に話しかけられるほうだ。」が半数に満たないことからも納得できよう。

「自分の考えを通すほうだ。」と思っている者よりも、「人の言うことは、すなおに聞くほうだ。」と思っている者のほうが多い。自分の表現することに自信がなく、どちらかといえば引っ込み思案な専門学校生像が示されているといえよう。

「英語は得意なほうだ。」と思っている者は、やはり12.7%と少ない。それなのに、「外国人に話しかけられても平気なほうだ。」と思っている者は33.3%で、「英語は得意なほうだ。」と思っている者よりも多い。内向的な面が認められるのに、意外である。町中に外国人の普通に見られる昨今の国際化の状況を反映しているのだろうか。あるいは、札幌のおおらかな風土が関係しているのだろうか。それとも、言葉によるコミュニケーション以外の要素も考えて回答しているのであろうか。様々な想像が可能な結果ではある。

4. おわりに

専門学校生の国語力を問題にしたので、そのすぐ前の高校の国語教育について述べることが多かった。調査の結果から、いくつかの考察を述べたが、述べ足りなかったことを、以下に述べて、本稿を終わりにしたいと思う。

来年度から実施される高校の新学習指導要領では、国語は国語Ⅰまたは国語表現のどちらかが必修なだけで、後の科目はすべて選択科目である。現学習指導要領と新学習指導要領を対比すると、次のようになる。（　）内に、標準単位数を示す。

＜現学習指導要領＞

国語Ⅰ　(4)
国語Ⅱ　(4)
国語表現　(2)
現代文　(4)
現代語　(2)
古典Ⅰ　(3)
古典Ⅱ　(3)
古典講読　(2)

国語Ⅰのみが必修で、他は選択科目である。国語Ⅰの中に、作文が1単位時間配当されている。

＜新学習指導指導要領＞

国語表現Ⅰ　(2)
国語表現Ⅱ　(2)
国語総合　(4)
現代文　(4)
古典　(4)
古典講読　(2)

国語表現Ⅰと国語総合のうち1科目が必修となって、他は選択科目である。現学習指導要領の国語Ⅰと国語Ⅱが国語総合に、古典Ⅰと古典Ⅱ

が古典にそれぞれ改編されている。また、国語表現が国語表現Ⅰと国語表現Ⅱに分かれた。そして、現代語がなくなった。国語総合の中で書くことの指導は、年間30単位時間程度が配当されている。

国語表現は、前々回の改訂で、表現だけを目的とする初めての科目として大きな期待を寄せられて誕生した。開設率は当初は今ほど低くはなかったものの、次第に減少していき、現在は専門学校生の履修率で見るように、34.2%とかなり低いものとなっている。この理由は、なによりも、その授業作りの難しさにある。そのため、どうしても問題集などの副教材に頼った授業になりやすい。それがまた生徒の学習意欲を削ぐというような悪循環となっている。

今回の学習指導要領の改訂で、国語表現は必修扱いを受けたり、国語表現Ⅰと国語表現Ⅱに分けられるなど強化されたが、開設率を上げることは難しいと思われる。

しかし、国語表現－作文の重要性は言うを待たないところである。かつて国分一太郎は、どうしたら生徒に作文力をつけさせることができるかとたずねられて、ともかく書かせることだ、なんでもいい、ともかく書かせることだ、と答えたという。

この国文一太郎の答えは、まったく正しいと思う。筆者は、高校でほとんど作文の指導を受けたことがなく（唯一の例外は、２年生３学期の自由研究のレポートである)、大学に入って、そのしわ寄せを受けたことを覚えている。講義で課題として出されるレポートがなかなか書けなかったのである。しかし、１字ずつ、１行ずつ、そして１枚ずつ苦労して書いて、自覚して思考しながら書くようになったと今は思う。作文ほど、総合的な国語力を養うものはない。教師が工夫して生徒に作文への動機を作り出して、生徒に目的を持った文章をたくさん書かせるべきだと思う。そのためには、作文だけを特立するのでなく、読解と関連づけて指導するなど、工夫が必要だと思う。いずれにしても、教師は授業づくりや添削等の労を惜しんではならない。

次に、読解に関しても１つ述べたい。それは、読解力は、ある程度の長さのまとまりのある文章を読み込んでいかなければ養われない、とい

うことを強調することである。問題集によくあるような細切れの文章を読むだけでは、決して読解力は養われない。ある程度の長さのまとまりのある文章を読んでいくと、いろいろなことに気づくものである。それは、能力とも感覚とも呼べるものであるが、ここでは感覚と呼んでおこう。そのような感覚を育てることが大切なのである。そのような感覚が、オリジナリティ溢れる考えの持ち主を創り出すのである。

最後に、話しことばについて述べる。調査対象であるところの学生たちの性格が内向的なことと、地方在住者のコンプレックスが大きく影響しているのかもしれないが、それでもやはり「自分の考えをうまく表現できないほうだ。」と思っている者が85.7%もいるのは、問題である。この質問項目は、話しことばを想定して聞いたのだが、書きことばのことを思って答えた者もいるかもしれない。しかし、話しことばに答えたと解釈して、以下、考察を述べる。

20年ほど前に企業経営者を対象にして行われた経済同友会の調査によると、従業員の話す能力には満足しているが、書く能力には満足していない経営者が多いという結果が得られている（経済同友会教育問題委員会（1980））。また、関東圏の35大学の学生を対象にコミュニケーション意識について調査した島村（1993）によると、表現活動においてやはり話しことばよりも書きことばに困難を覚える学生が多いという結果が得られている。そうすると、「自分の考えをうまく表現できないほうだ。」と思っている専門学校生が85.7%もいるという今回の調査の結果は、深刻といえる。書きことばに限定して聞いたら、この数字はもっと大きくなるであろうことは、想像に難くない。

日本人の言語能力が理解よりも表現に劣っていることは、戦前の壮丁教育調査の国語の調査結果を分析した大田（1955）以来、再三、指摘されてきたことである。そして、理解重視の社会が、上の命令を聞くだけの専制国家となりやすいということは、国民に聖書を読むだけの能力を要求したスウェーデン社会を分析した梅根（1967）の指摘するところである。民主社会は、合議制なのだから、人々の表現能力に大きく依存する。これまで言語能力を含めた学力は、人的資本論の立場から、経済と

結び付けて語られることが多かった。しかし、本稿で述べるように、それは民主主義とも結び付いている。民主的な日本を発展させるためにも、言語能力を含めた日本人の学力は高められなければならないだろう。そのためにも、学校教育の役割は大きい。言語環境の実態に鑑み、学習者の意識や能力を高める教育内容の見直しは、今後とも続けられるべきであろう。

以上

[付　記]

本稿で報告した調査は、島村と矢部の２人が共同で行い、そして、原稿は、まず島村が稿を起こし、その後で矢部と協議して成稿とした。そのため、本文中の筆者とは島村を指す。

調査に協力ご協力いただいた学生諸君に心から感謝いたします。

注

＊１　漢字検定準１級と１級の出題範囲と審査基準は以下の通り。

準１級

程度：常用漢字を中心とし、約3000字の漢字（JIS 第一水準を目安とする）の音･訓を理解し、文章の中で適切に使えるようにする。

領域：書くことと読むこと

常用漢字の音･訓を含めて、約3000字の漢字を読み、その大体が書ける。

○熟字訓、当て字、対義語、類義語、同音・同訓異字などを理解すること

○典拠のある四字熟語を理解すること

○国字を読むこと（峠、凧、畠など）

○表外漢字を常用漢字に書き換えること

領域：故事・諺

故事成語・諺を正しく理解する。

１級

程度：常用漢字を含めて、約6000字の漢字　（JIS 第二水準を目安とする）の音・訓を理解し、文章の中で適切に使えるようにする。

領域：書くことと読むこと

常用漢字の音・訓を含めて、約6000字の漢字を読み、その大体

が書ける。

○熟字訓、当て字、対義語、類義語、同音・同訓異字などを理解すること

○典拠のある四字熟語を理解すること

○国字を書くこと（怺える、峠る　など）

○地名・国名などの漢字表記（当て字の一種）を読むこと

○常用漢字体と旧字体との関連を知ること

領域：故事・諺

故事成語・諺を正しく理解する。

＊2　小学校学習指導要領によると

小学校学習指導要領（1989（平成元）年３月）

３年生

〔言語事項〕

イ文字に関する事項

(エ)漢字のへん、つくりなどの構成についての初歩的な知識をもつこと。

４年生

(ウ)漢字の構成についての知識をもつこと。

５年生

(ウ)漢字の由来、特質などについての初歩的な知識をもつこと。

６年生

ウ表記に関する事項

(ア)送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。

現行小学校学習指導要領（平成14年４月１日から施行）

〔言語事項〕

3．4年生

(1)「Ａ話すこと・聞くこと」、「Ｂ書くこと」及び「Ｃ読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

イ文字に関する事項

(イ)漢字のへん、つくりなどの構成についての知識をもつこと。

ウ表記に関する事項

(ア)送り仮名に注意して書き、また、活用についての意識をもつこと。

5．6年生

(イ)仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること。

イ表記に関する事項

(ア)送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。

文献

大田尭（1955）「大衆の学力」『思想』375号、pp.76-85.
梅根悟（1967）『世界教育史』新評論
経済同友会教育問題委員会（1980）『国語教育の新たな展開を求めて－アンケート調査果報告－』経済同友会
島村直己（1993）「大学生のコミュニケーション意識－関東圏の35の4年制大学の学生に対するアンケートの結果(2)－」『計量国語学』18-8、pp.369-381.
島村直己（2001）「近代日本のリテラシー(1)－壮丁の地域別リテラシー－」『言語生活研究』1号、pp.3-22.
武部良明（1981）『日本語表記法の課題』三省堂
読み書き能力調査委員会（1951）『日本人の読み書き能力』東京大学出版部
財団法人日本漢字能力検定協会ホームページ
http：//www.kanken.or.jp/
野平俊水（2002）『日本人はビックリ！　韓国人の日本偽史』小学館